

超長期ビジョンの今後の検討項目と手順（案）

- 1 ビジョン策定の趣旨（環境基本計画記載の趣旨を踏まえ改めて整理したもの）

このままでは環境・資源上の持続可能性の危機が想定される。
危機を生じさせず持続可能な社会を実現していくために、2050年を展望して
目指すべき環境像・社会像を提示する。
バックキャストの考え方も用いて今後の取組の方向を示す。
- 2 検討の手順（検討会での「検討の手順」 から を多少整理加筆したもの）
 - (1) 社会経済の趨勢の整理と環境資源上の持続可能性の危機が懸念される問題の
検討

環境・資源に関係の深い社会経済の趨勢について整理する。
社会経済の趨勢の下での環境・資源に生じうる（＝避けるべき）持続可能性
上の問題を抽出整理する。
 - (2) 目指すべき環境像の整理

持続可能性上必要な資源・環境面での条件を明らかにして目指すべき環境
像を示す。
 - (3) 目指すべき環境像実現のための社会の姿とシナリオ、政策の方向性の検討

予想される複数の社会経済シナリオを検討する。
望ましい環境像を達成した状態の社会像とそれを実現する道筋のシナリオ
複数を検討し、提示する。
- 3 社会・経済の趨勢
 - (1) 人口、少子高齢化、地域社会
 - (2) 経済（世界、アフリカ、アジア、日本）
 - (3) 世界規模の資源制約の強まり（石油、鉱物、水、森林）
 - (4) 食糧需給の不安定化（世界の穀物、畜産、海洋漁獲量、我が国の食糧自給）
 - (5) 人口配置、居住
- 4 持続可能性へのリスク
 - (1) 地球温暖化等の問題
 - ア 温室効果ガスの排出の増加、地球温暖化による気候変動
 - ・BAUで予測平均4 と破局的事態の可能性が現実味
 - イ エネルギー資源（特に化石燃料）の枯渇
 - (2) 物質循環に関する問題
 - ア 物質資源の減少枯渇の問題
 - イ 物質の大量消費・非循環的消費に伴う廃棄物処理、リサイクルに関する問題
 - ウ 汚染の問題

(3) 生態系に関連する問題

ア 生物多様性の劣化（エネルギー資源、物質の大量使用による環境悪化や人間による直接的圧力などによる）

イ 水資源、森林資源、食料の不足

（環境の悪化や人為圧力等による資源自体の劣化減少、人口の増加、地域的不均衡）

(4) その他の問題

（ヒートアイランド、景観・・・）

5 目指すべき2050年の日本と世界の環境像

（持続可能性からの要請を満たす環境像）

(1) 地球温暖化、エネルギー資源問題

ア 温室効果ガスの排出の増加、地球温暖化による気候変動の問題

・地球温暖化による大きな危険を生じさせない。

温度2度上昇までで止める。

吸収能力以下に排出を抑える。（ 年までに）

イ エネルギー資源（特に化石燃料）の枯渇問題

・枯渇による問題を避ける。

そのための消費量の削減と再生可能エネルギーの利用拡大

一人当たりエネルギー消費量を2トン（石油換算/年）に削減する。

(2) 物質循環問題

ア 物質資源 イ 廃棄物

・長期にわたって資源枯渇が生じないことを目指すとともに、リデュース、リユース、リサイクルを進め、さらに再生可能資源の活用を進める。

2050年において「資源投入に占める循環的資源の比率」を80%とする。

（循環的資源 = 循環資源 + 再生可能資源）

・廃棄物の適正な処理が確保された状態とする。

ウ 汚染

・物質の利用に伴う汚染によるリスクを、現在の程度以下の、生命、健康、生活環境に対する影響が許容範囲内のものとなるようにする。

(3) 生態系に係る問題

ア 生物多様性の減少、生態系全体の劣化（エネルギー資源・物質の大量使用による環境悪化や人間による直接的圧力などによる）

・現在程度の生態系の水準の確保・維持を目指す。

イ 水資源、森林資源、食料の不足（生態系サービスの減少、不足）

・世界全体の持続可能性の中で我が国おける需要を持続的に満たす。

国内的には、森林資源の自給、食料の自給を拡大する。

また、良好な国際関係の確保、世界の持続可能性確保のための連携協力を進める。

(4) その他の問題

6 目指すべき環境像を実現している2050年の社会像

(1) 社会像A グローバル化重視型社会

世界の動きの趨勢のうち、経済のグローバル化自由経済化の部分に沿った対応を行い、国境の壁を低くし国際的な連携を重視して持続可能な社会作りの対応を進めている社会。

(2) 社会像B 国家自立重視型社会

世界の動きの趨勢のうち、国家の自立性独立性を重視する部分に沿った対応を行い、国家の自立性を強めて持続可能な社会作りの対応を進める社会。

(3) 社会像C 国際的連携と国家自立とを柔軟に組み合わせたより効率的な持続可能社会（玉鋼国家）

強化された自立性（自給率上昇など）と柔軟で強靱な国際連携の確保により持続可能性を実現する社会。

7 2050年に向かう道筋の検討

(1) シナリオA グローバル化重視型持続可能社会への道筋

国境の壁の低いグローバル化した世界市場を活用して、世界全体の効率的で活発な経済活動の中で、世界及び我が国の持続可能性を確保しようとする道筋。我が国としては、国境を低くして、国際的な経済活動の発展の中で持続可能性を確保していこうとする道筋。

(2) シナリオB 国家自立重視型持続可能社会への道筋

世界全体の共通性より各国の独自性をより強め、それぞれの持続可能性を高めることで、世界全体としても持続可能性を確保する道筋。我が国としては、各種の物質や農林水産品について自給率を高めることに重点を置き、国内での循環の確保に努めることなどで持続可能性を確保していこうとする道筋。

(3) シナリオC 国際的連携と国家自立とを柔軟に組み合わせた自立連携型社会への道筋（玉鋼シナリオ）

それぞれの国家ごとの持続可能性を極力高めるとともに、健全なルールと独自性の一定の尊重の下のバランスの取れた国際連携により、世界の持続可能性も確保する道筋。我が国としては、自給率の向上などと、適切な国際連携の両方を積極的に進めていく道筋。

{ 今後の検討においては、概ね個々で掲げるシナリオに沿って、それぞれを具体的にモデルの要素に当てはめ分析の上、フィードバックして望ましい社会像の検討を進めていく。 }

8 不確定な要因、今後の変動等について

超長期にわたるビジョンを検討するに当たっては、その間に予測と異なる外的要因（例えば大戦争、大地震）が発生することがないとは言えない。そのような不確定要因をも考慮に入れた対策シナリオを用意しておくことが必要。引き続き検討を要する。

状況は年々変化していくものであり、シナリオの検討は継続する必要がある。

9 結び

長期ビジョン検討内容の深化の必要性。

状況の変化に対応した超長期ビジョンの継続的見直しの必要性。

ビジョンを具体的な政策検討の指針として活用し、持続可能な社会への歩みを確実にする必要性。